

8
323

(M)

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 3 6 10 1 2 3 4 5

始



8
32

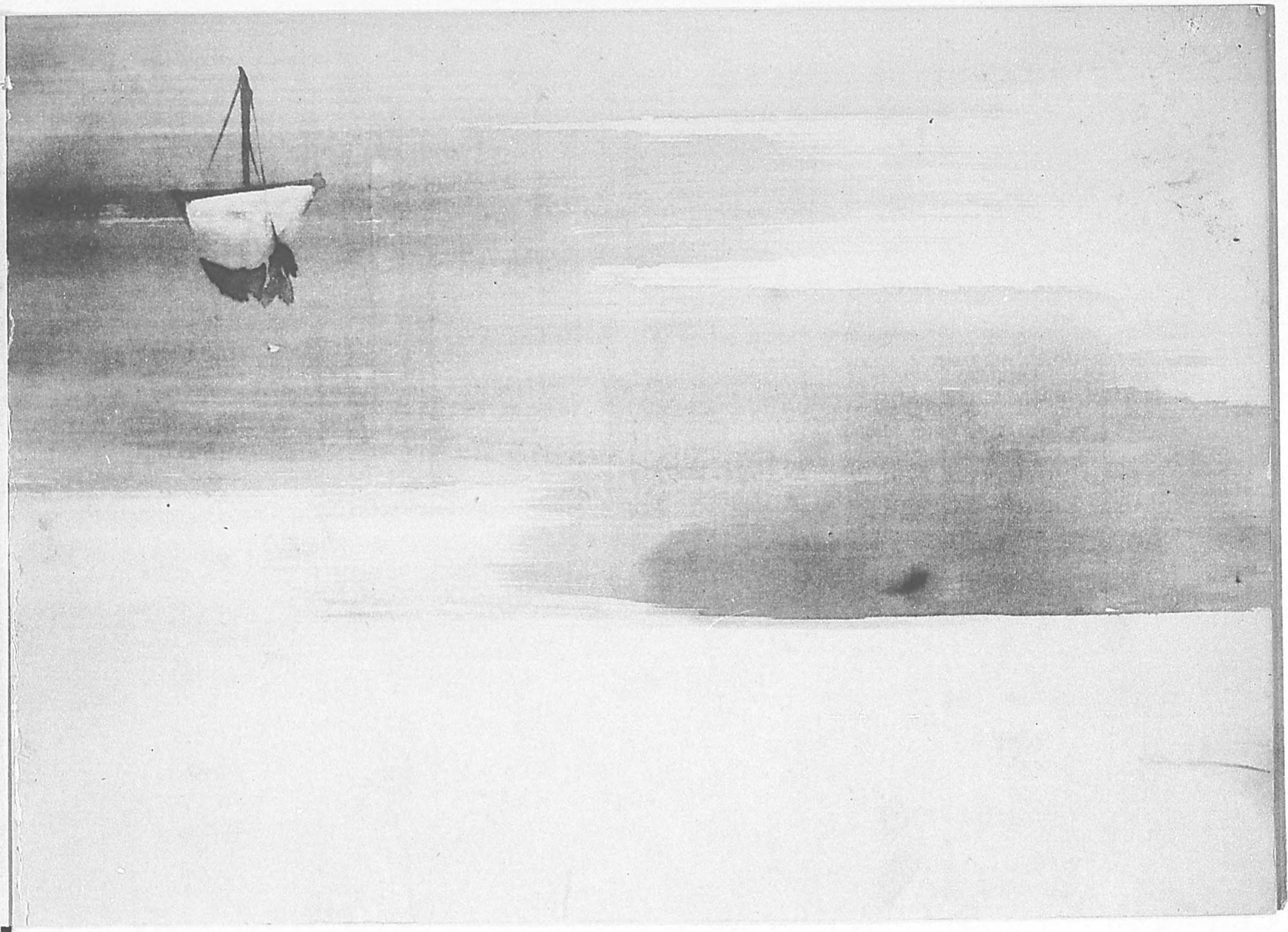
旅
乃

家

付
と



紀伊の巻



聯合製版

關、海濱白日懸

鎮管效年金剛因

焚香僧福具冬露

華島人編回覽果



如海嶼空掃天散

香林鶴鹿舞千晴

寒雲直入大羅天

不替風流壯勝曲

高裡山全景

高野山全景

不待飄搖挾羽仙

袈裟直入大羅天

老林盤地藏千刹

峻岳摩空拆八蓮



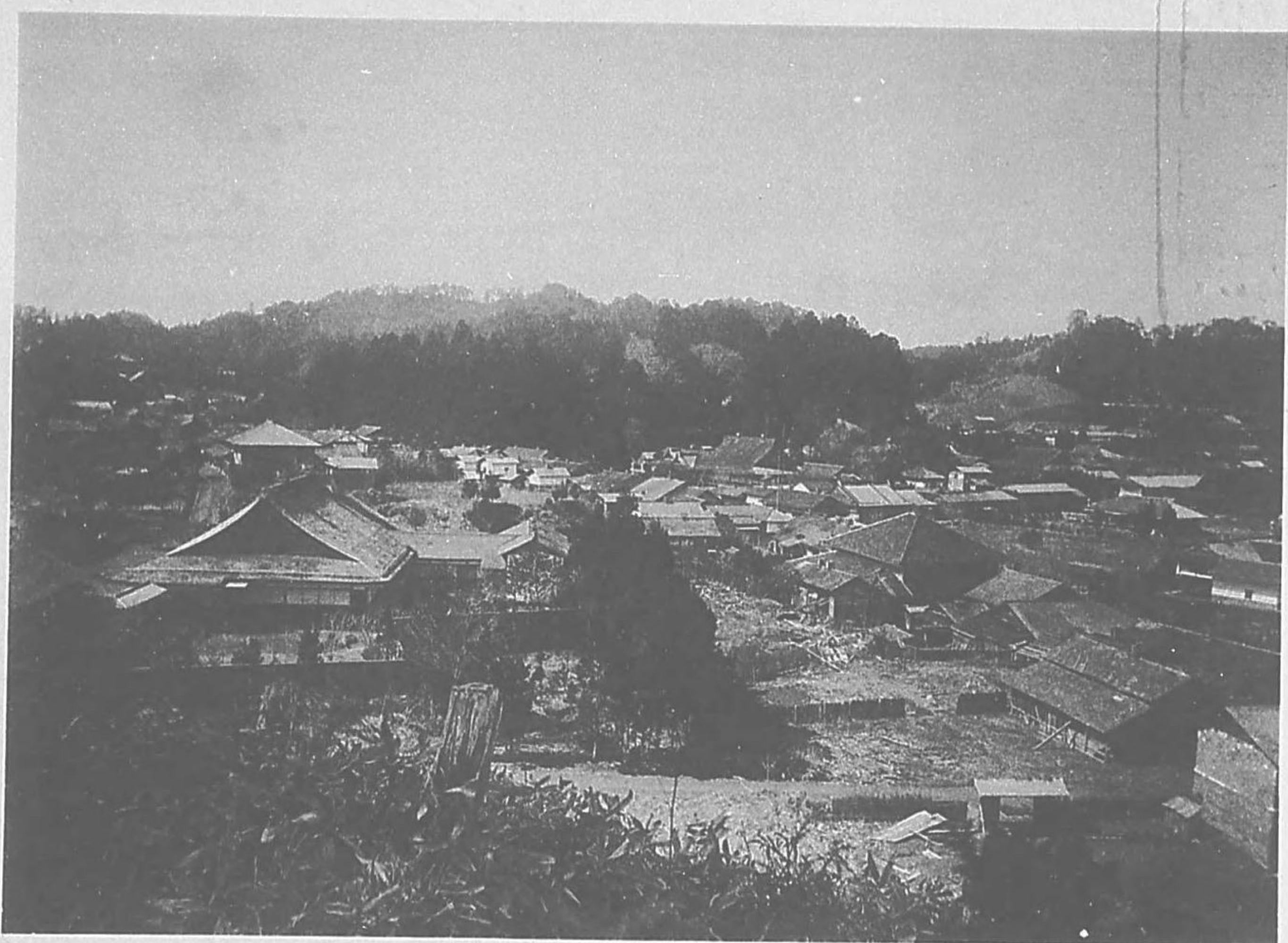
拜佛人躋何鏤界

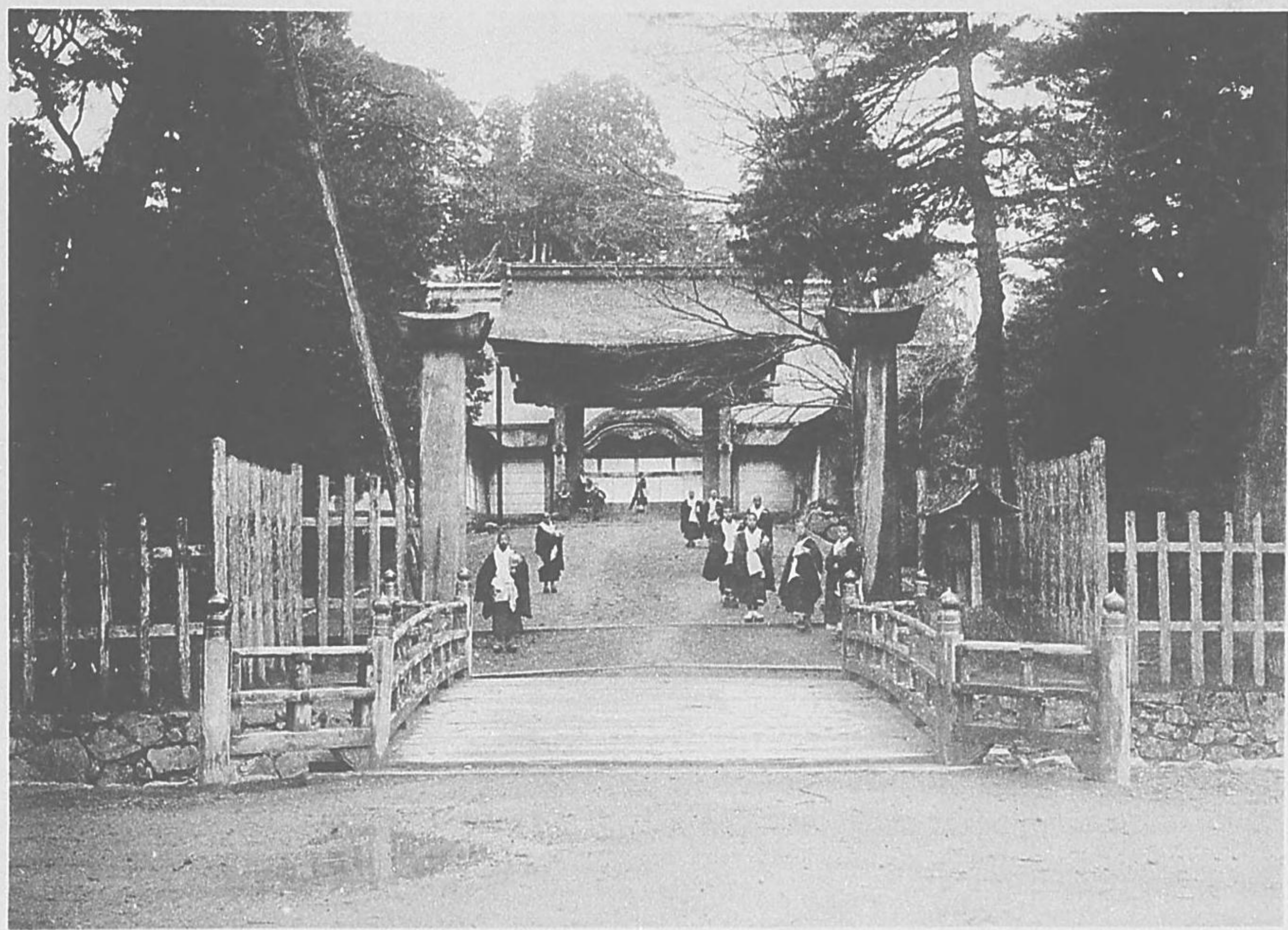
焚香僧誦貝多篇

疑看放手金剛閃

爛々松梢白日懸

落合雙石





高野山表門

たかの山

苔のみむろな

天のくに

さぢし光も

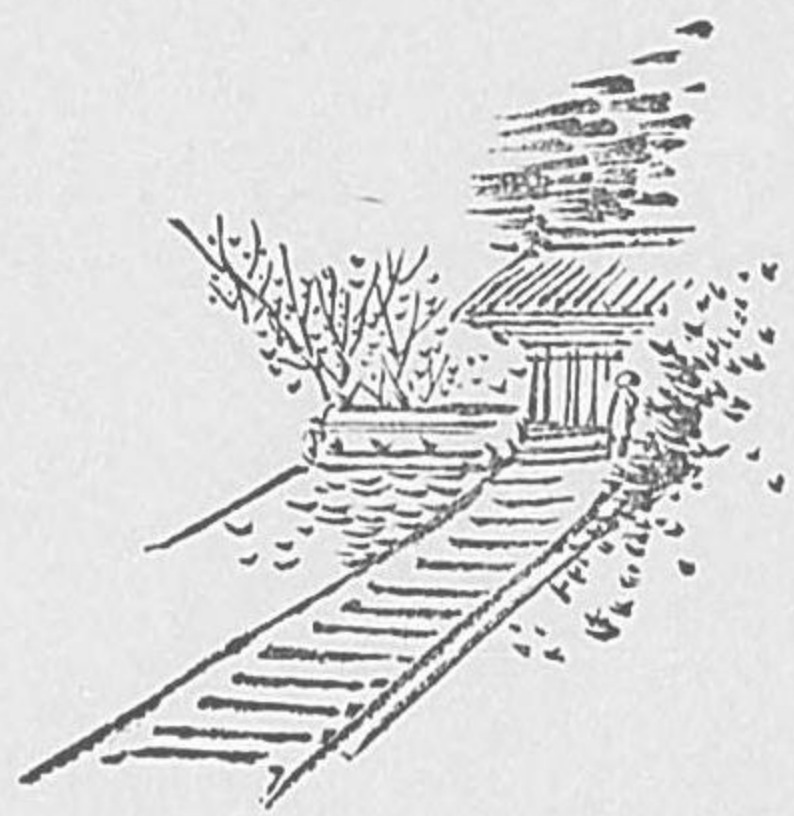
いつか照さん

契冲

父母の顔に

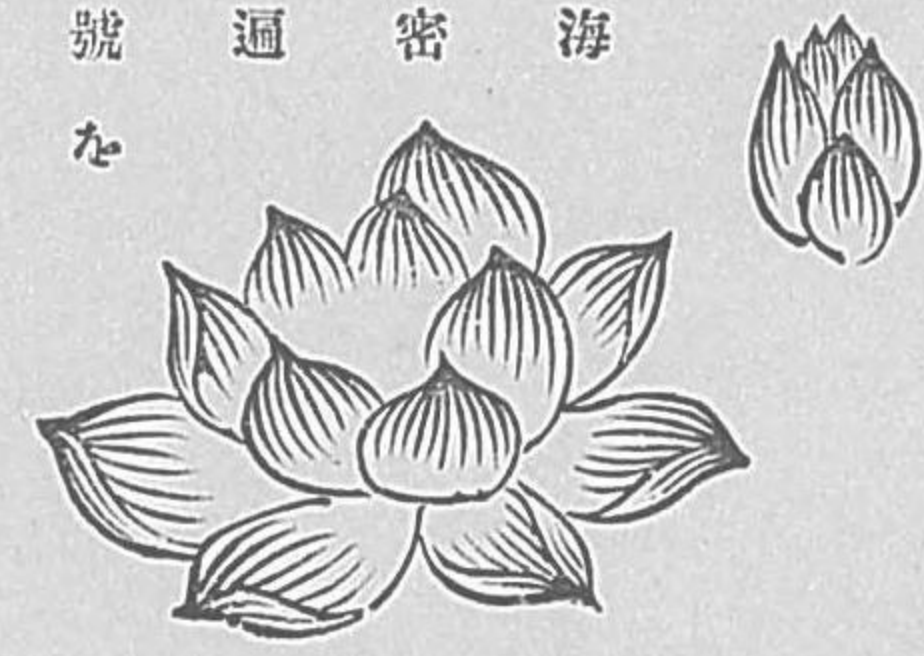
こひし雉子のこゑ

芭蕉



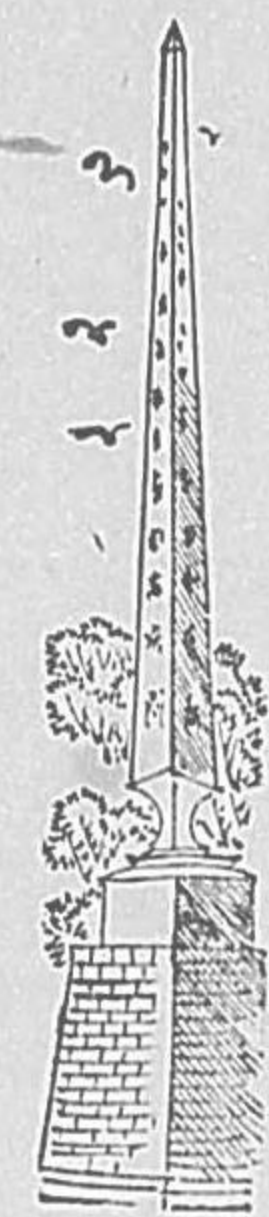
高野山金堂

弘仁年中僧空海
嵯峨帝の勅允を蒙りて
當山に大伽藍を創建し
金剛峰寺と名づく即空海
和尚入定の靈地眞言秘密
の道場にて宗門海内に遍
布す和尚に弘法大師の號を
賜ひしもうべなるかな



高野山鐘堂

風無うして杉檜忽聲を
成す知る是空中天狗の
行くを一萬僧徒齊しく
定に入り峰雲淵月夜三
更ニ廣瀬旭莊が賦せし
も宜なり



曉の夢破れて
寒し鐘の聲



高野山大塔

二層十六間四面高さ十六丈
南天の鐵塔に擬す

あらゝぎも

高のや雪の

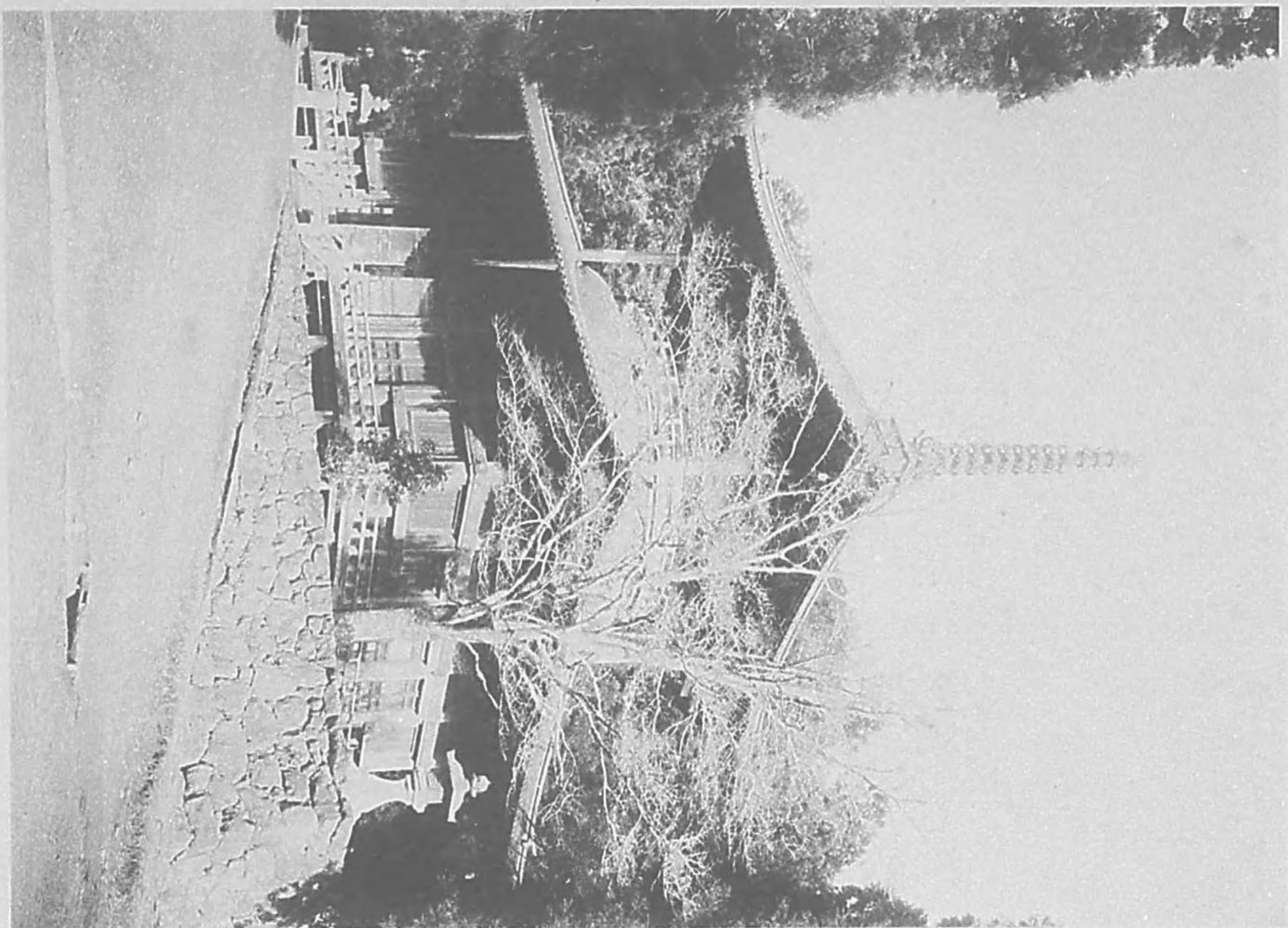
朝ぼらげ



若葉にも

つしまず高し

塔の先



紀の川より若山城を望む

勢和國界の高嶺より發し西流
して海に注ぐ城内第一の長川
名付くるに國號を以てするも
宜なり望む所の臥虎城外郭を
撤すも雖三層の天主閣巍然と
して翠松の間に聳はる今なほ舊
容を存せり



鷺森神社

太古此の地に榊の大樹
ありて枝葉四方に廣がり
常に樹上に白鷺栖みて
遠く望めば深雪に埋む
山の如く見ゆしとぞ
森の名因りて起る所なりと
口碑に傳ふ

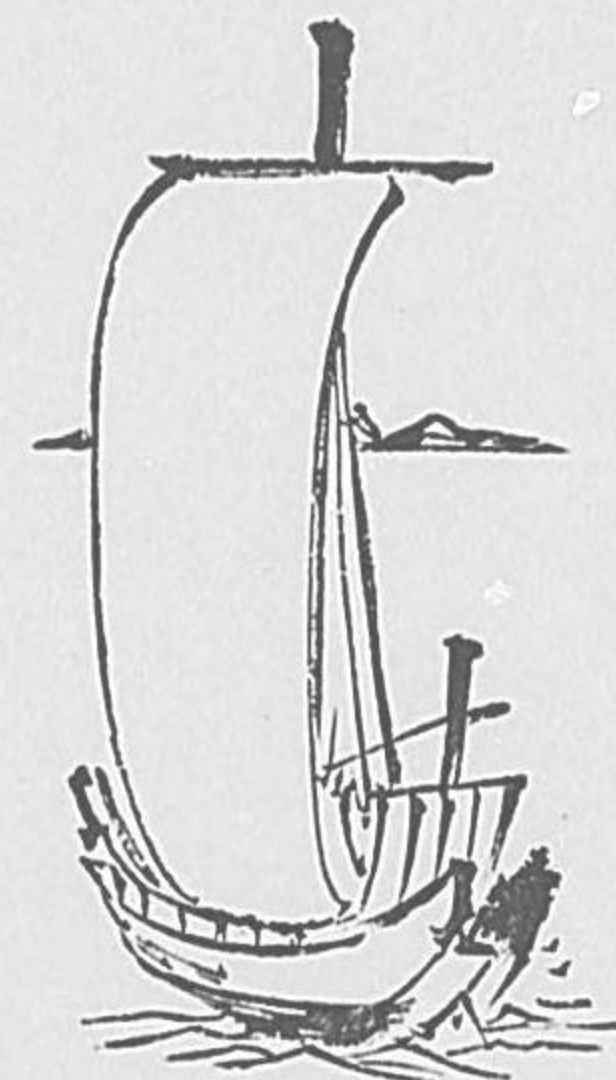


白ゆふを
懸けし若菜や
鷺の森



加太海岸

鹽氣立つ荒磯にはあれど往く水
の過去にし妹が形見とぞ來し
と柿本人麻呂が詠ぜしは此の浦
なり



若和布にも

春のみどりや浦日和





粟 島 神 社

神功皇后三韓より凱旋

ましくける時海中暴

風起りしかば神祇に祈

り給ひしに御船友が島

に着せり其屬さなる淡

島に少彦名命を祀れり

しな喜びまし此神の導

きならんと寶刀を納め

給ふ今の粟島神社是也



紀三井寺

名草山上に在り金剛寶寺護國院と
號す山内に楊柳清淨吉
祥といふ三派の法水あ
るを以て紀三井寺とも
呼ぶ其紀の字を添へし
は江州の三井寺に別た
ん爲なり眺望風景の絶
佳は今更にいはんも贅にこそ



和歌の浦

わかしの浦を松の

葉こしに眺むれば

梢にふする

あまの釣舟

寂蓮



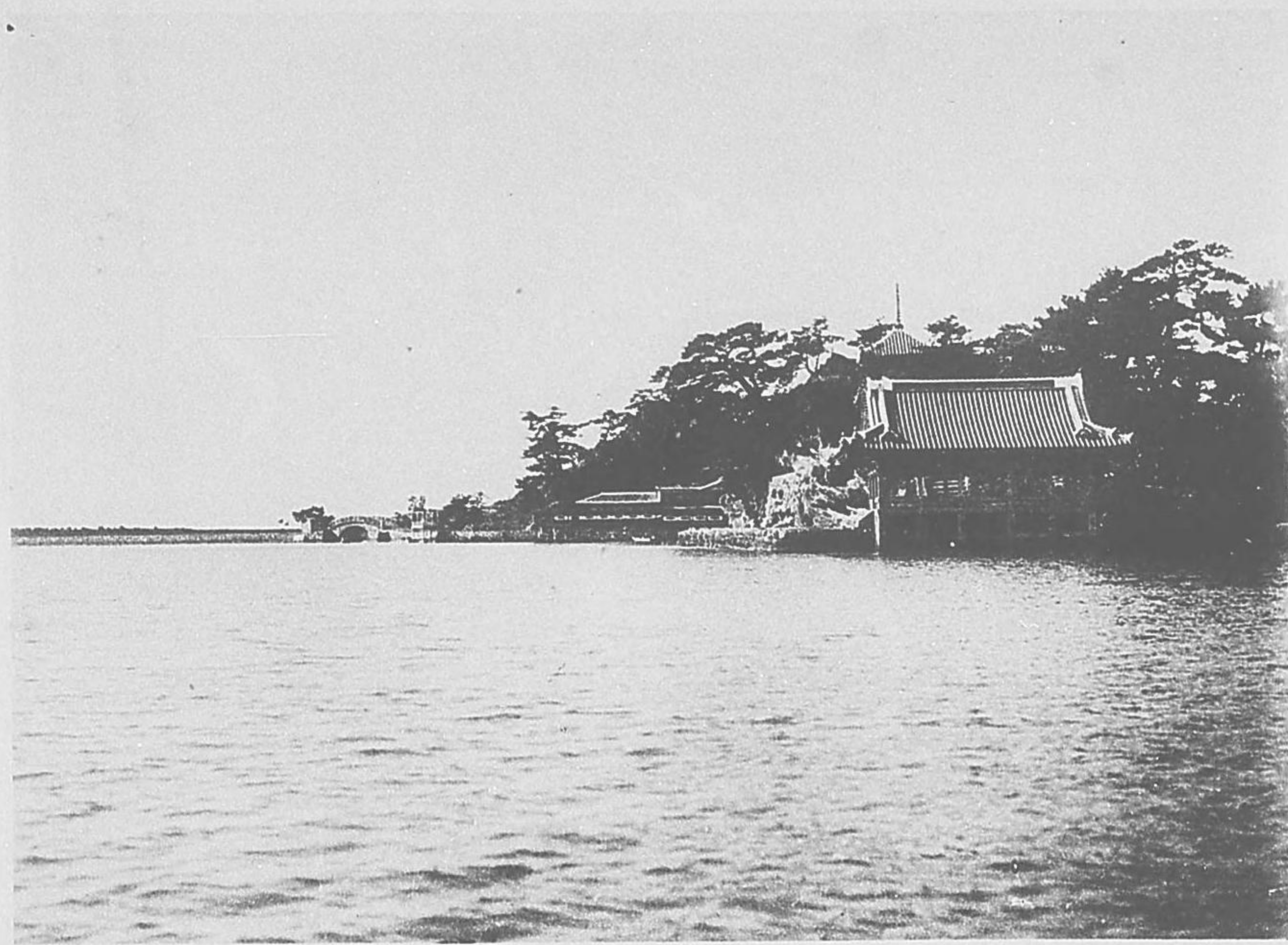
和歌のうらに

鹽木重ぬる契なば

かける焼藻の

跡にてぞ見る

西行



和歌の浦より紀三井寺を望む

翠の松白き砂の浦續き
打ち寄する浪の音しい

と長閑なり朝霞や、晴
れて名草山を望みたる

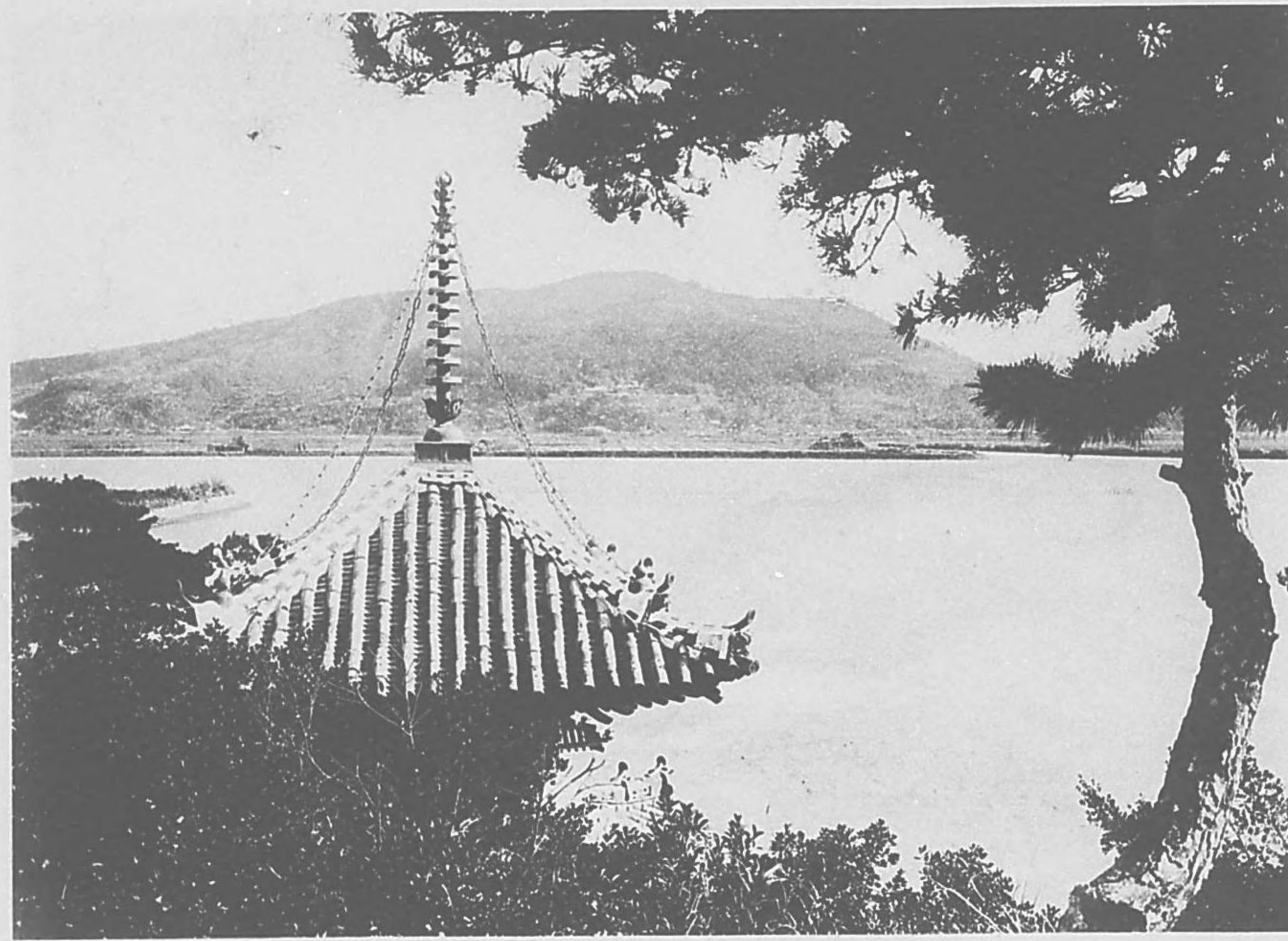
いひしらずをかし俳士
芭蕉翁が



行春に若の浦にて

追付たり

こいへるもげにさる事にこそ



蘆邊茶屋

若の浦に

潮満ち來れば

渦を無み

蘆邊を

さして多頭

鳴き渡る



山部赤人の一首は茶屋の名にさへ
残りて鶴の聲と共に世に響けり





不老橋

日本三景に劣らぬ此の風光古よ
り詩に賦し歌に詠じて盡したれ
ば今之を二十
八言三十一言
に述べたりと
も陳腐にて辭皆老いたり唯橋の
名のみは浦の名と、もに若しや



鹽竈神社

御やしるいミ神さびて
聲く鹽竈といふ名もな
つかしうて釣する蟹人も
こゝに寄らなんぞぞ
思はるゝ



松風に

靡くや秋の

夕けふり

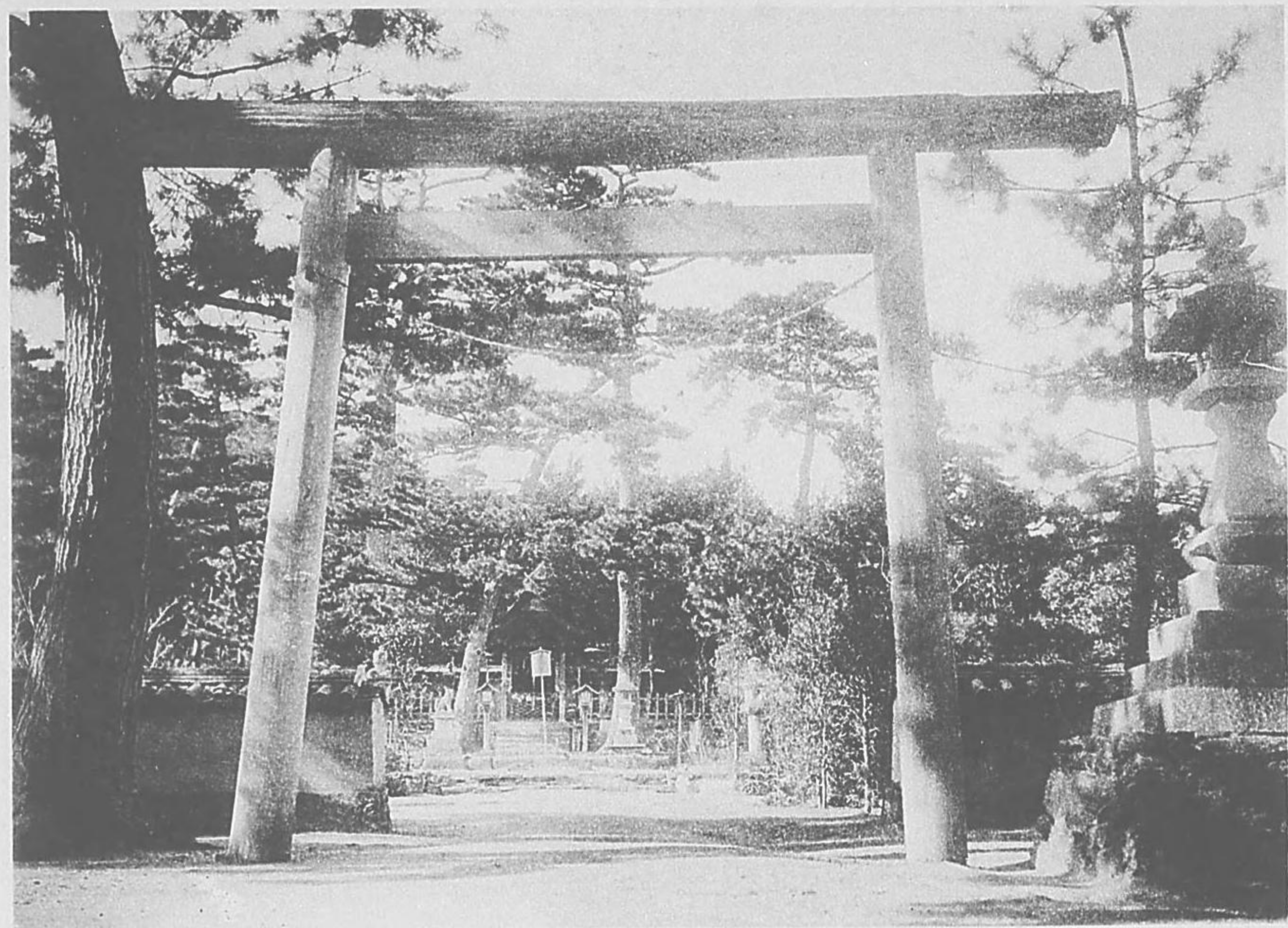


玉津島神社

浦の御霊に衣通姫を祀
せ祭るといふ



聖武帝當社に詣で給ひ
し時春秋二時に官人を
差遣はし玉津島の神明
光の靈を奠れと詔りた
まひしよし國史に見ゆ
たり其の創祀の年月い
と古くして詳ならず



片男波

萬葉に詠めるかたをな
みは干潟無きまゝにこ
いふ意なるを寄する男
波のみにて反へる女波
無きに由りて片男波と
呼ぶと土人の口碑に傳
へしより名高くなれり



七夕に女波に

あへや片男なみ



和歌東照宮

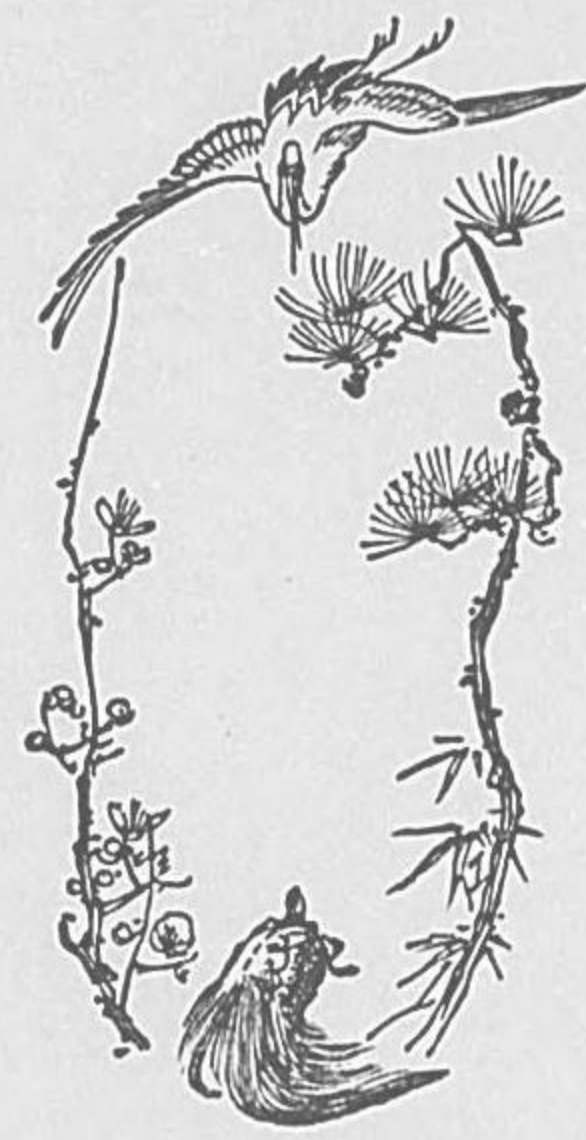
剝石怪崖笑鄴工

浮空積翠下仙風

人間未見此靈境

天上不知箇秘宮

紀陽山人



春秋心

かはらぬ色や

三つあふひ





根上り松

白菊の花かあらぬか涙
のよするかこ菅相公の
詠み給ひし秋風の吹上
に名
高き
根上
も
り松
千
年を
経に
けん
摧け
う
つ
か
せ
て今
は僅
に一
木を
残
さ
るも
昔の
紀念
いと
偲
ば
し

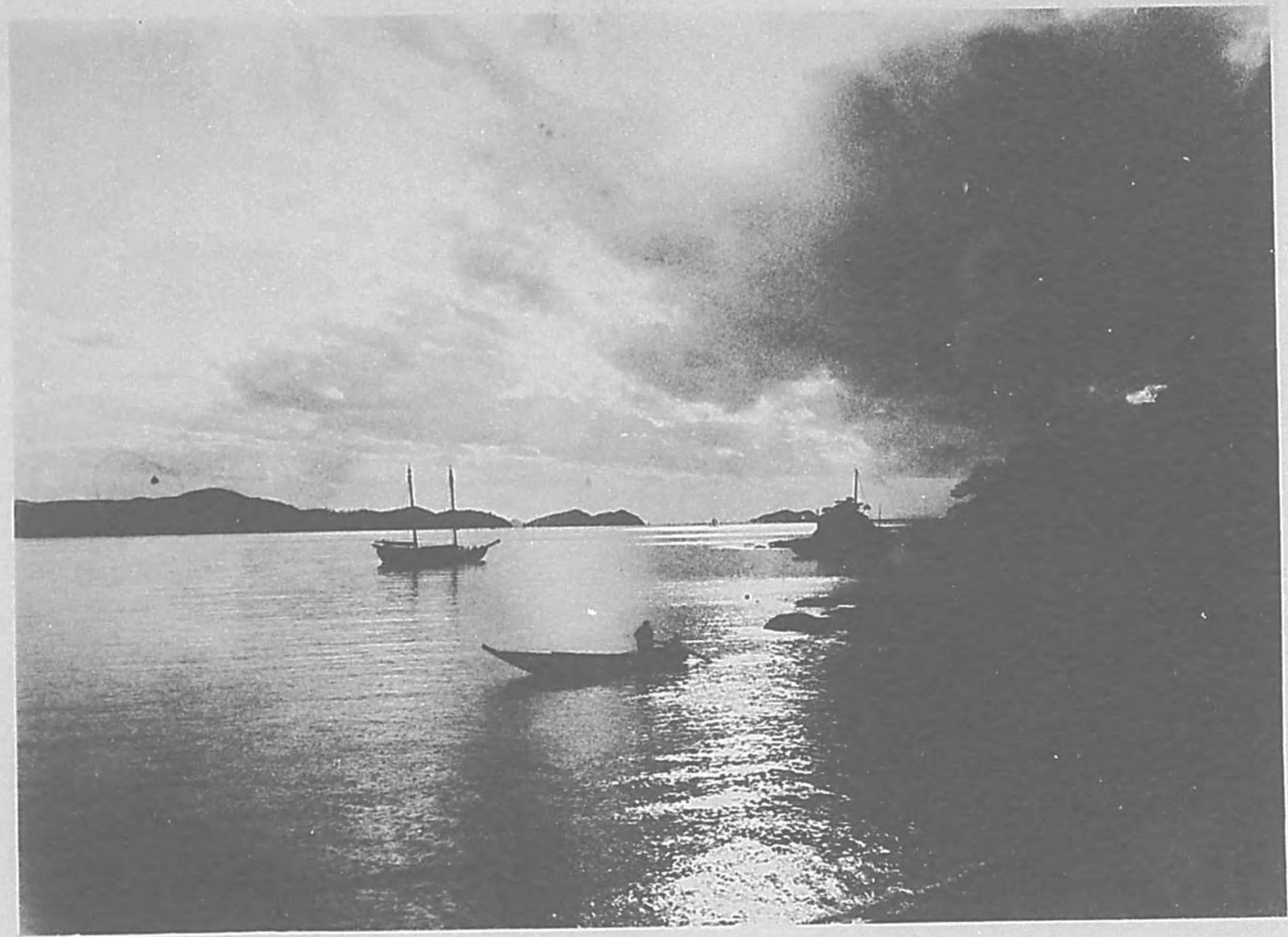


出嶋の陽光

月のけしきの面白きは
いはんも更なれど波の
音響きて眺遙なる島山
にさしいづる朝日子の



影を待ちとりたる横雲
の空やうく白みて海
のおもてきらめきわた
る光又類ひなうさわや
かなり



五百羅漢

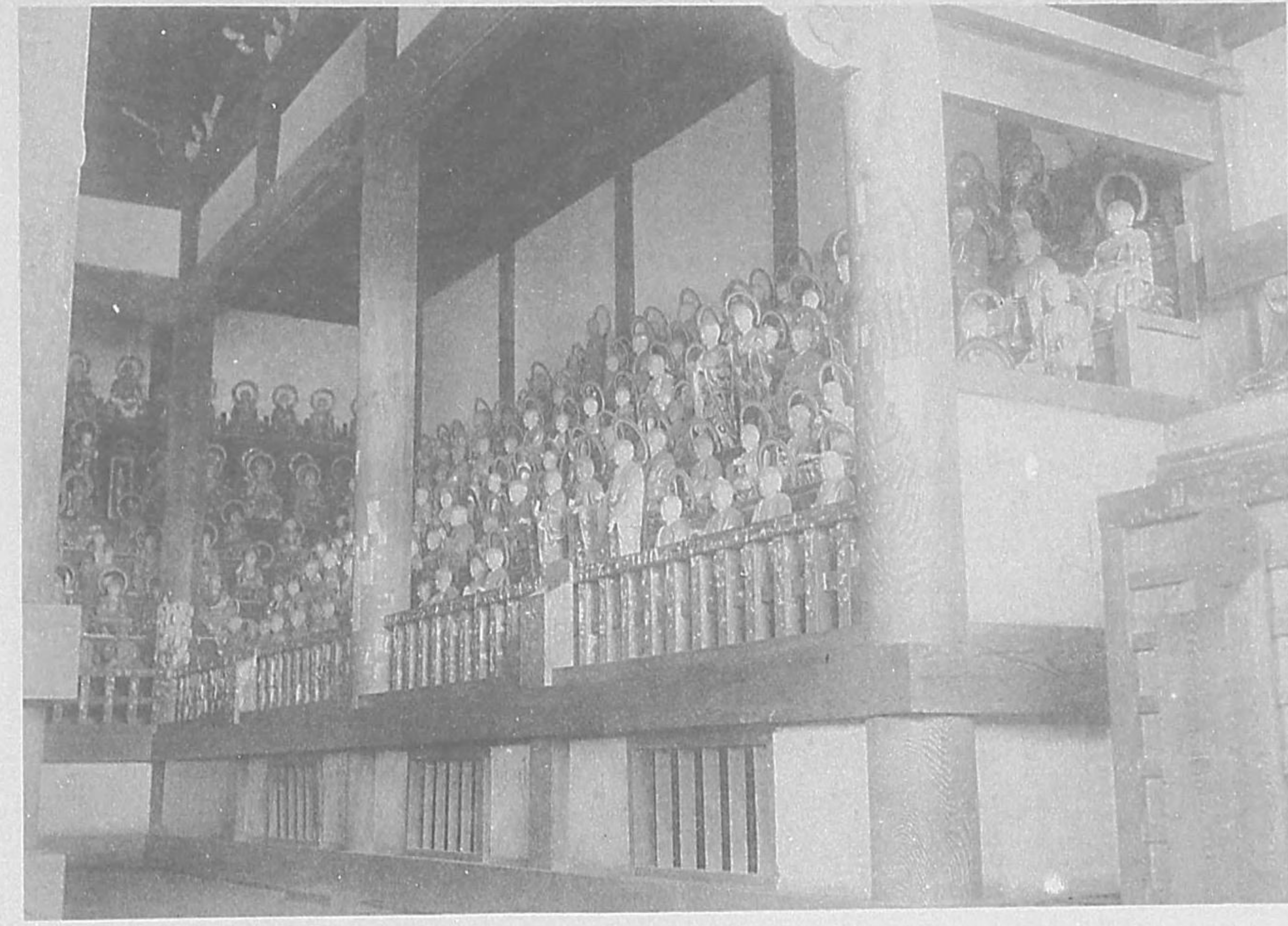
牛千の羅漢立つあり坐す
るあり各自其面を殊にせるは
人心の別なるを示せり
されど佛の教化によりて
大悟徹底果を得るに至つ
ては一なること必せり



さまざまの

色に置けり

花のつゆ



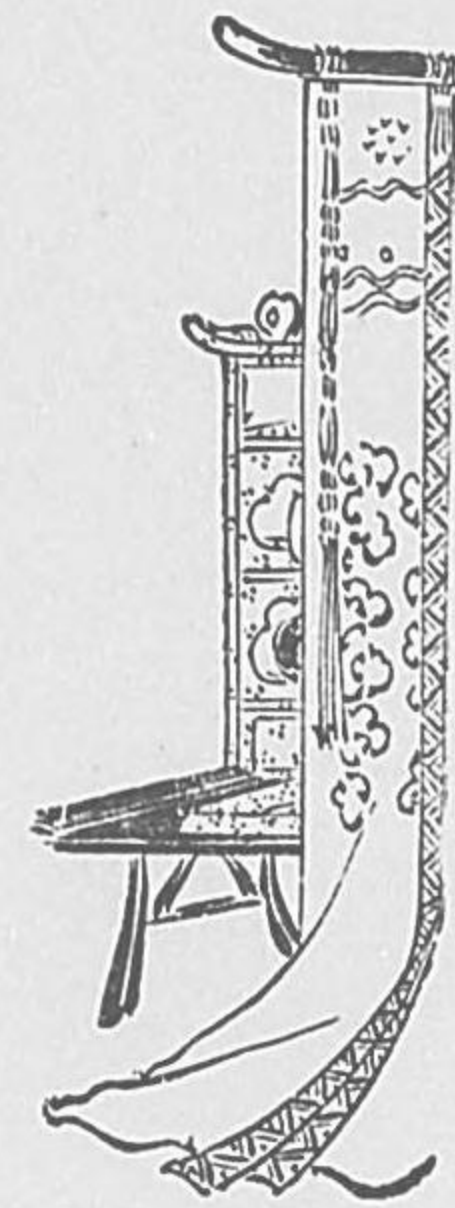
道成寺

煙滿ち來る小松原日高の

寺は謠曲に名高く鐘に恨

は數々ござるゝ歌舞に道

成寺を知らざるものなし



文武の皇后御創建の古刹

たる由緒よりも安珍清姫

の爲に世に稱へらるゝが

なかし





鹽津港

出舟あれば

入舟ありこの

諺を目のあた

りに見る港の

賑ひ萬の貨の

つぎふありさま

富の羨といはんも可なり

古人句あり

満てくる鹽津に

照るや秋の月



鉛山港

銀沙金液好詩料

芝石龍巖好畫材

天意謫降祇伯玉

彩毫龍真勝區來



湯崎温泉揚の景は此詩をもて
想ふべし鉛山の繁榮は此圖を
もて大方知るこそを得ん



鉛山満月洞

まじかなる

月のほらより

ながむれば

鏡と光る

沖の白波



潮ばかり

満千見せけり

月の洞



日高川

裏なしも

表なしもうせう方へ

うせよと安珍を追っかけし

清姫渡し守の舟出さずば

かくこそと忽蛇になりて

川波蹴たて渡りたる跡と

さくも恐ろしやく



那智陰陽の瀧

三熊野の那智の

み山に引くしめの

うちはへてのみ

落つる瀧かな

鎌倉右大臣



雲消ゆるなちの

高峯に月たけて

光をぬける

瀧の白糸

四行法師



那智権現

日本第一の瀧の邊に鎮り在す
神の御心殊更に潔く思ほすら
んまいと尊し

山水の

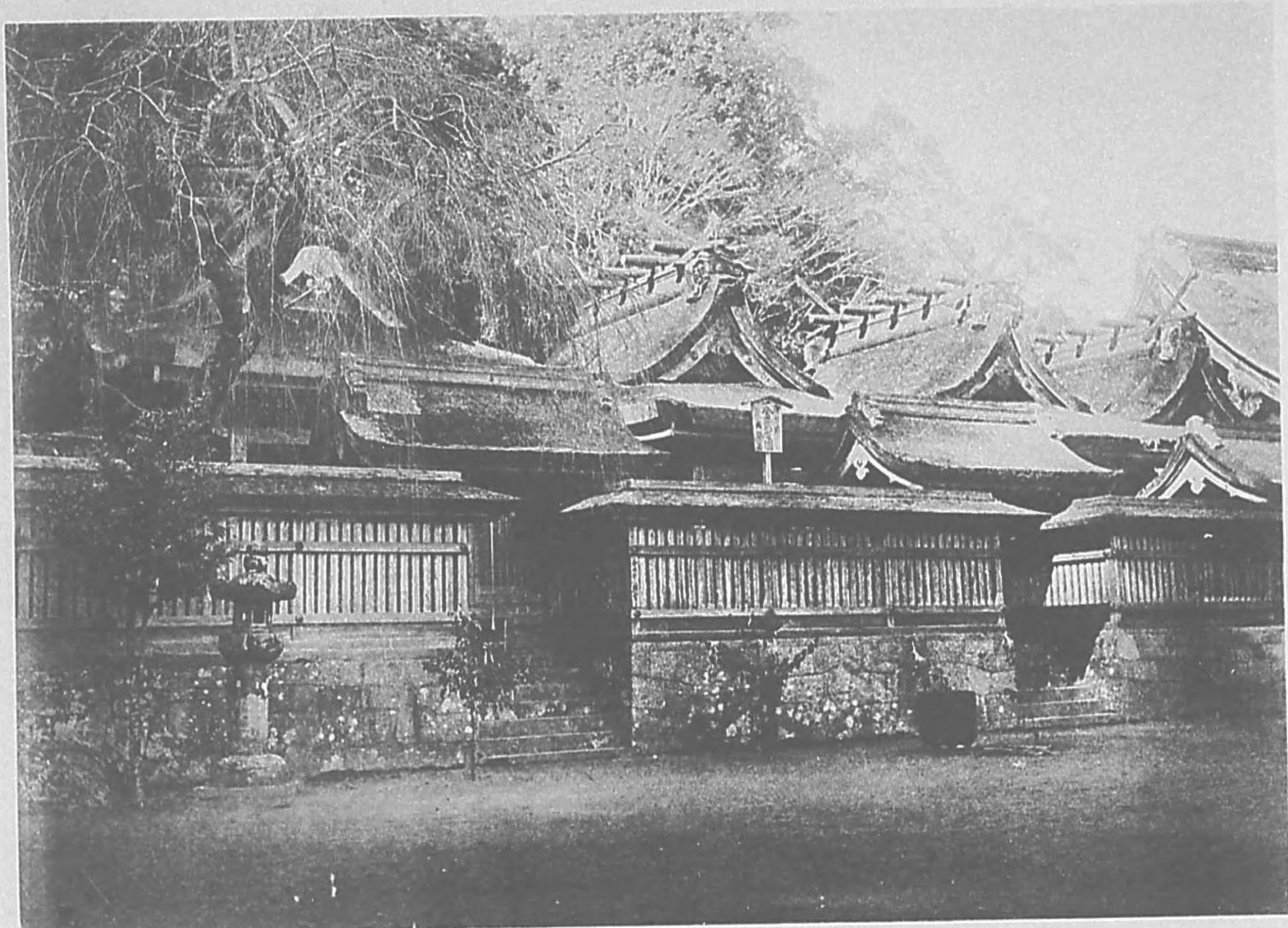
姿きよけき

御社は

今も神代の

こゝちこそ

すれ



那智観音

ふだらくや

岸うつ波は

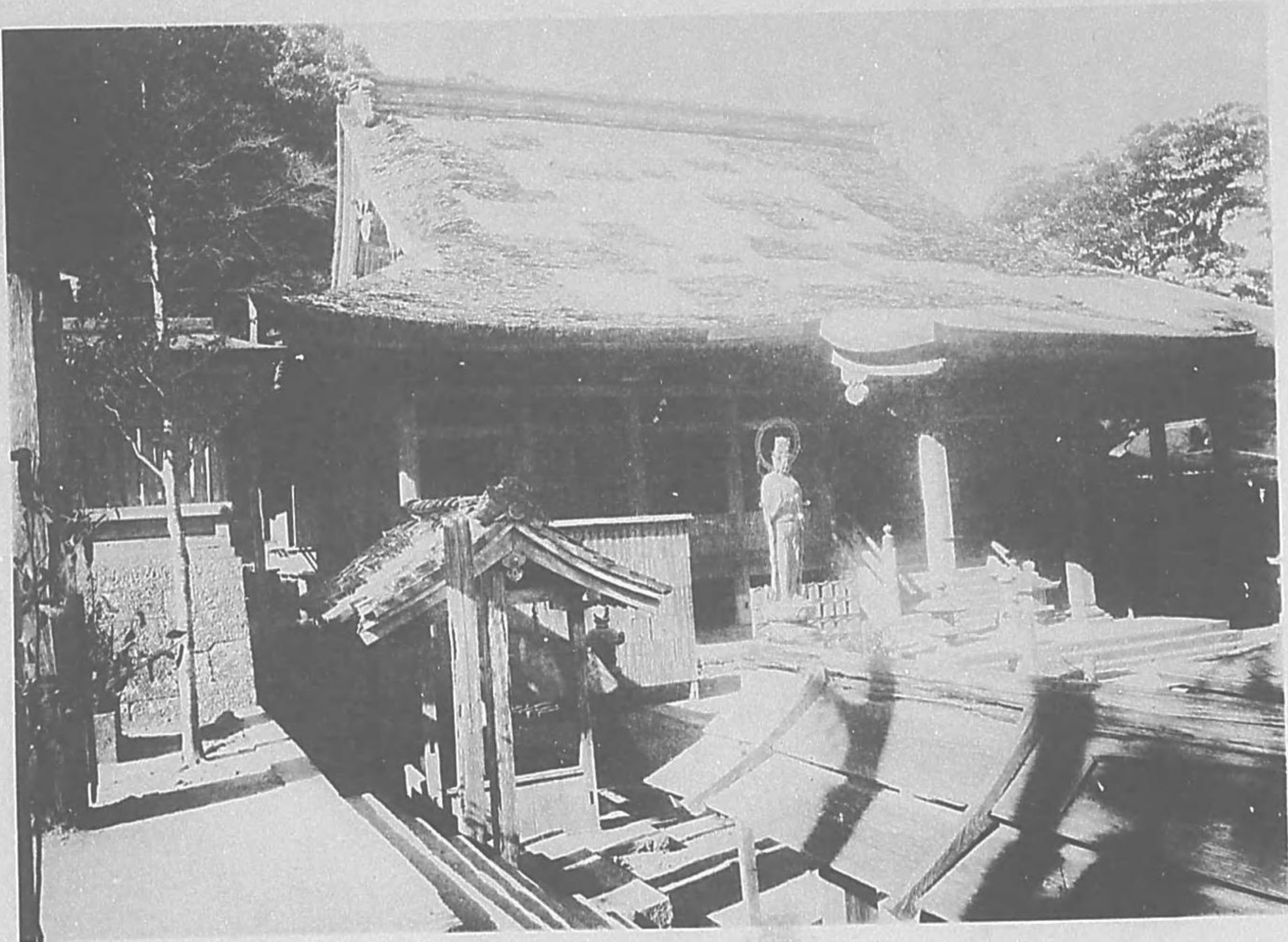
三熊野の

那智のお山に

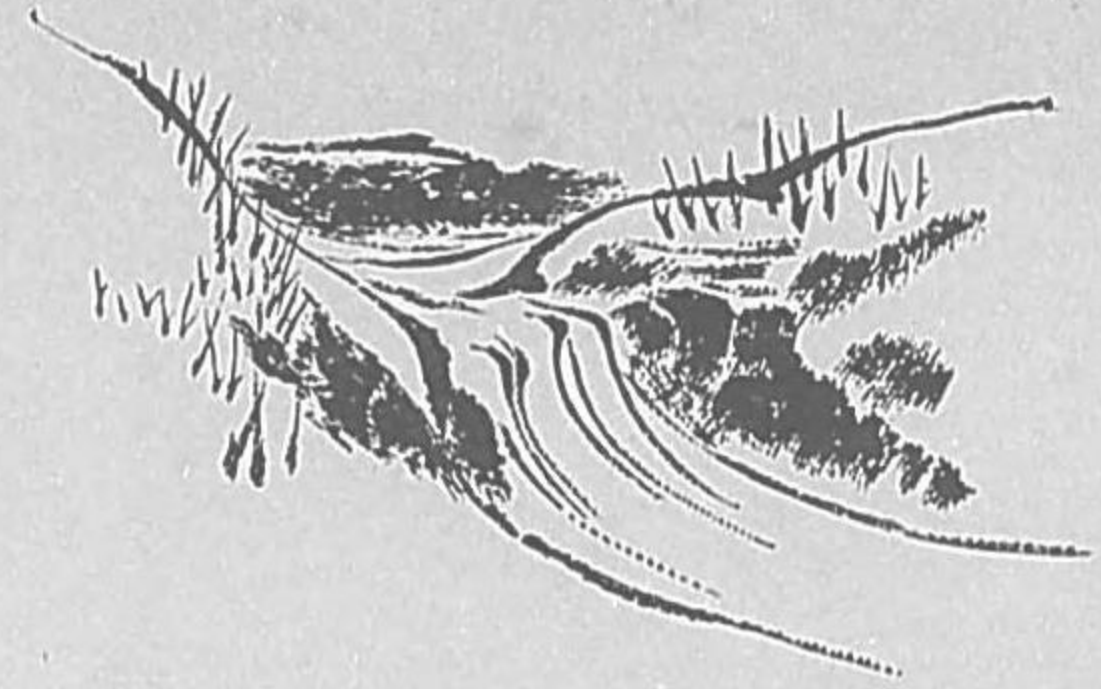
ひびく瀧つせ



と聲哀に唱へて順禮の詣づる
西國三十三所観音霊場第一番
の札所なり其もとは花山法
皇これを始め給へりといひ傳
ふ



那智の瀧



那智の山途に

落つる瀧つ瀬に

すくぐ心の

塵ものこらじ

式乾門院

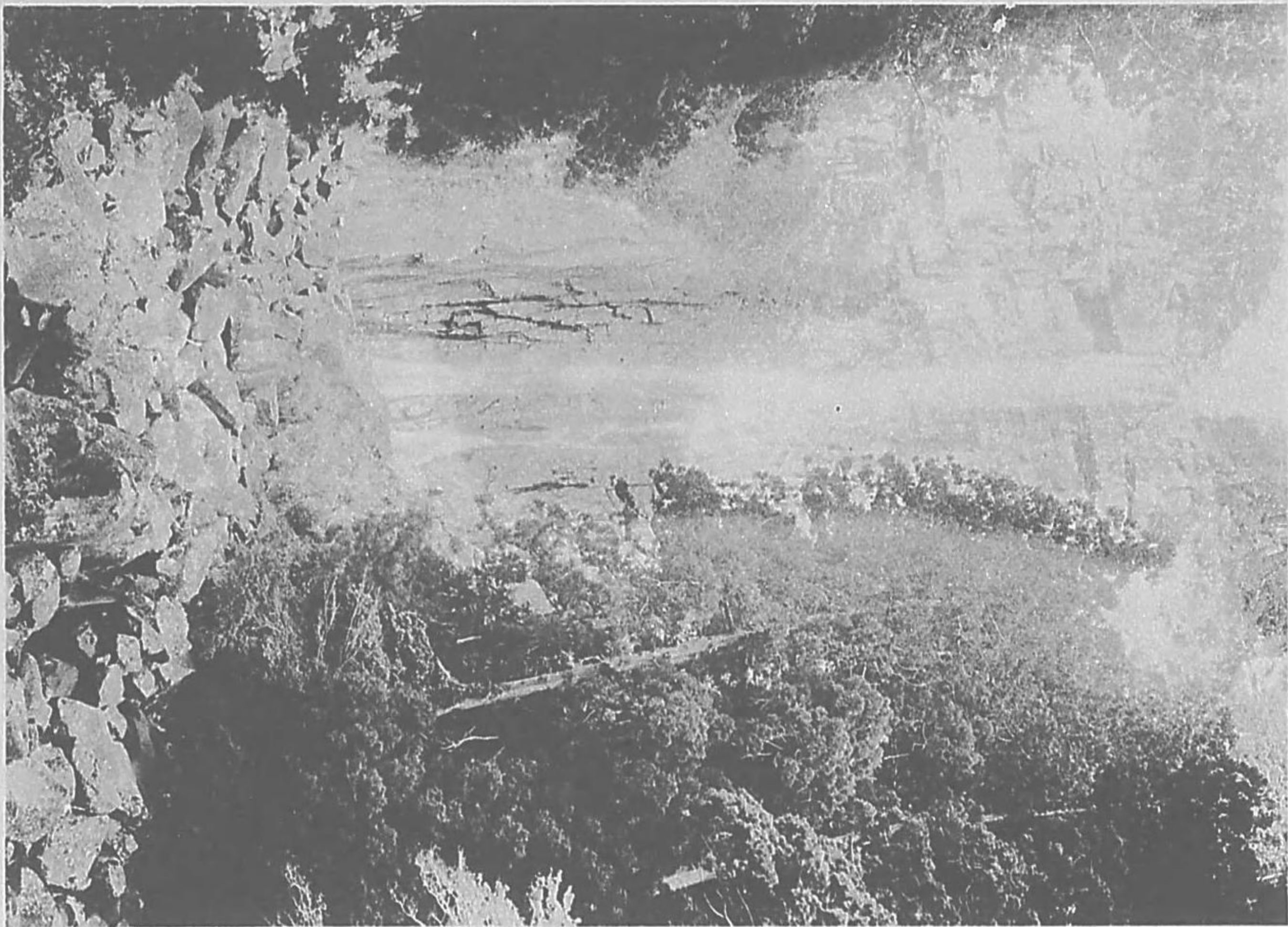
なちのやま雲井に

みゆる岩根より

千尋にかゝる

瀧の白糸

光明峯寺攝政



那智一の瀧

李青蓮が

飛流直下三千尺

疑是銀河落九天

と賦せし蘆山の瀑布にも劣らじ



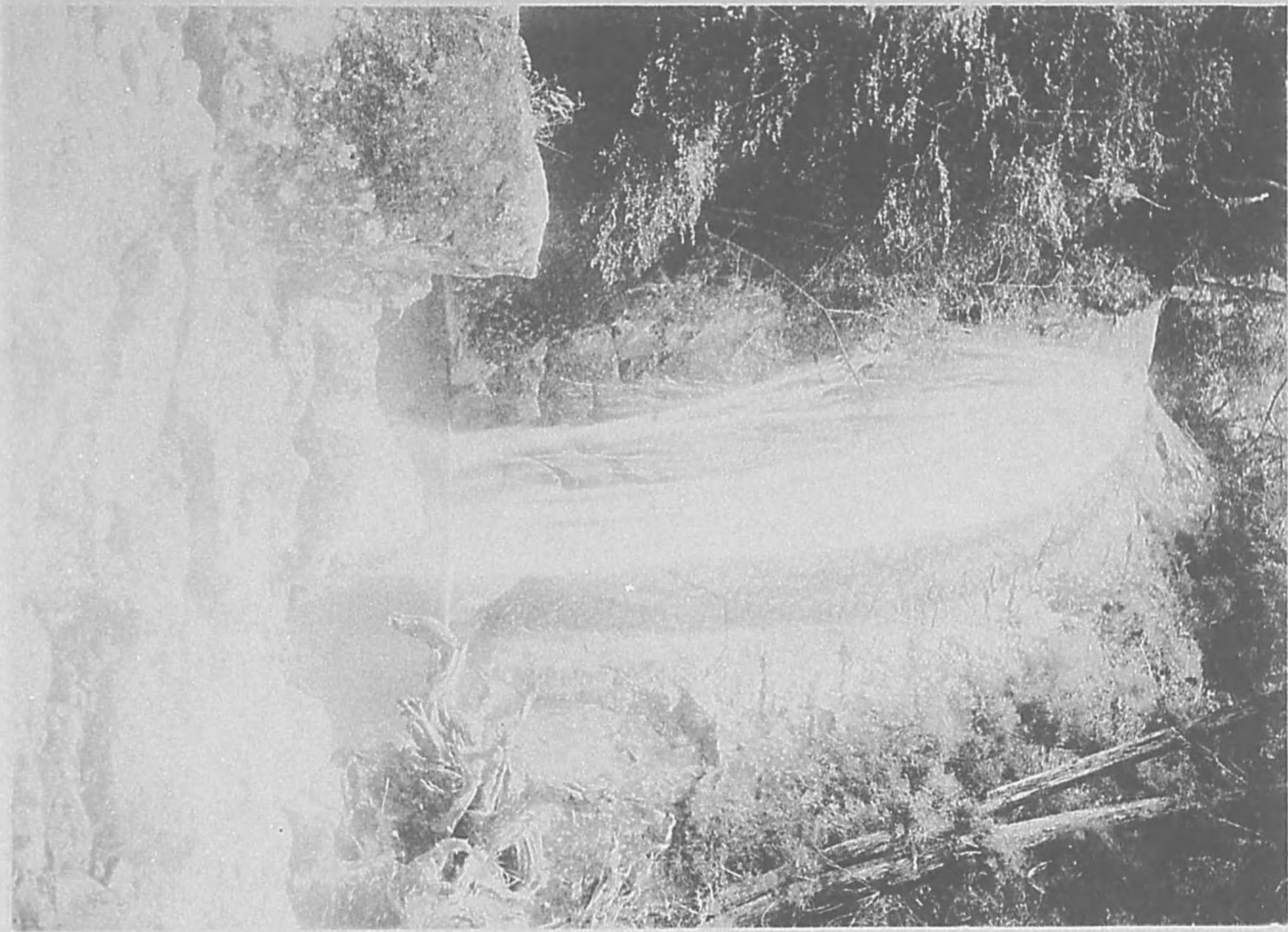
瀧つせなふり

さけ見れば大空に

神とくろきて

雪ぞちりくる

千
廣



熊野浦

諺に九十九浦と稱す其
廣きこと推知すべし此
浦に莖は芭蕉の如く葉
は萬年青に似て花は白
幣の形したる草を生ず
之を濱木綿といふ

*
三熊野の浦の

はまゆふ幾かへり

春を重ねて

霞きぬらん



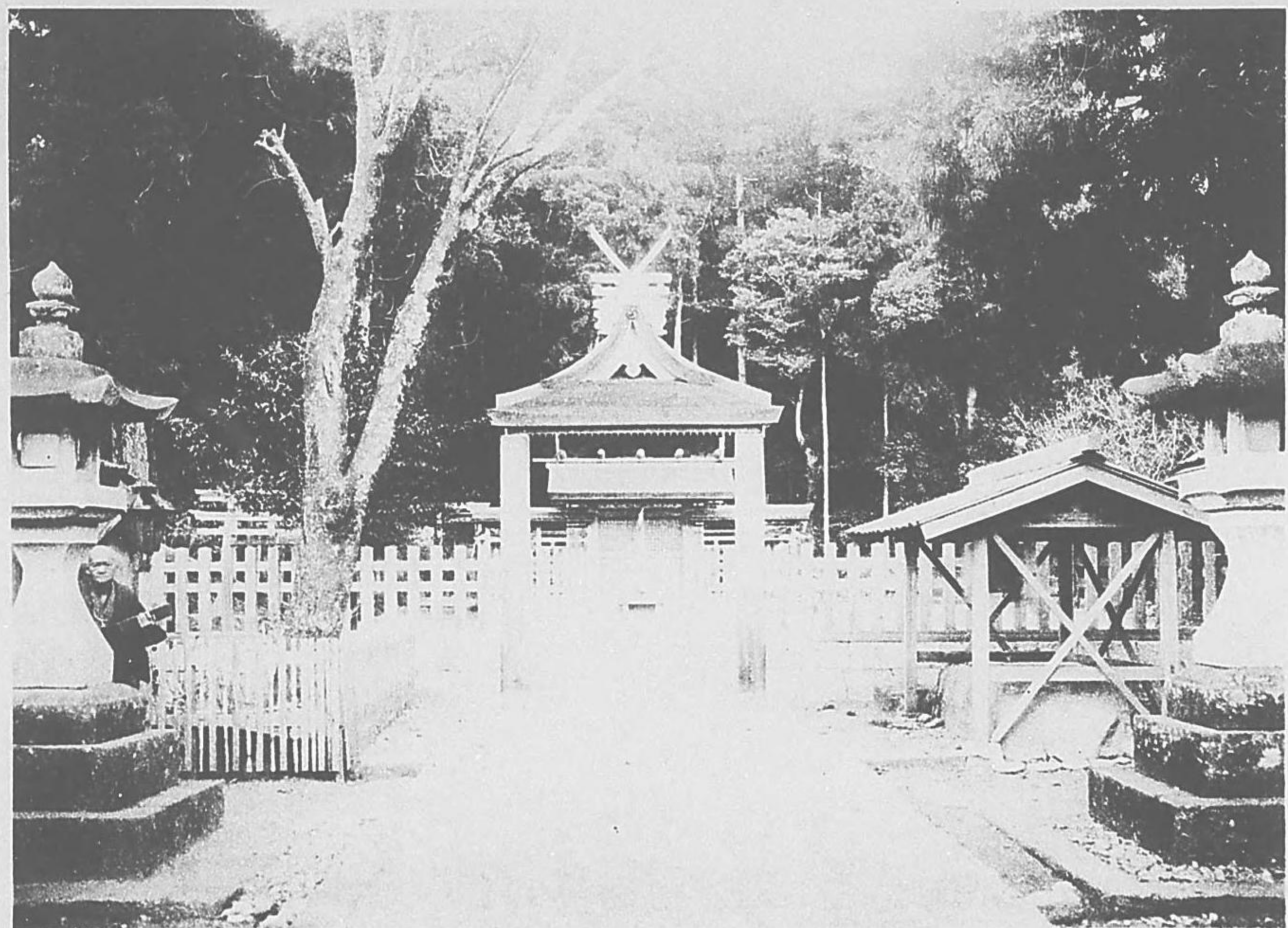
熊野神社

仁徳天皇六年に鎮座ありしといふ現今美麗宏壯なる十三の神殿は嘉永四年に造營する所なり古より當社へ代々の

天皇行幸ましくける事

舊史に見ゆ神庫に寶物及び

倫旨院宣等なまた藏せり



新宮 権現

熊野夫須美大神伊邪那美

命熊野速玉大神伊邪那岐

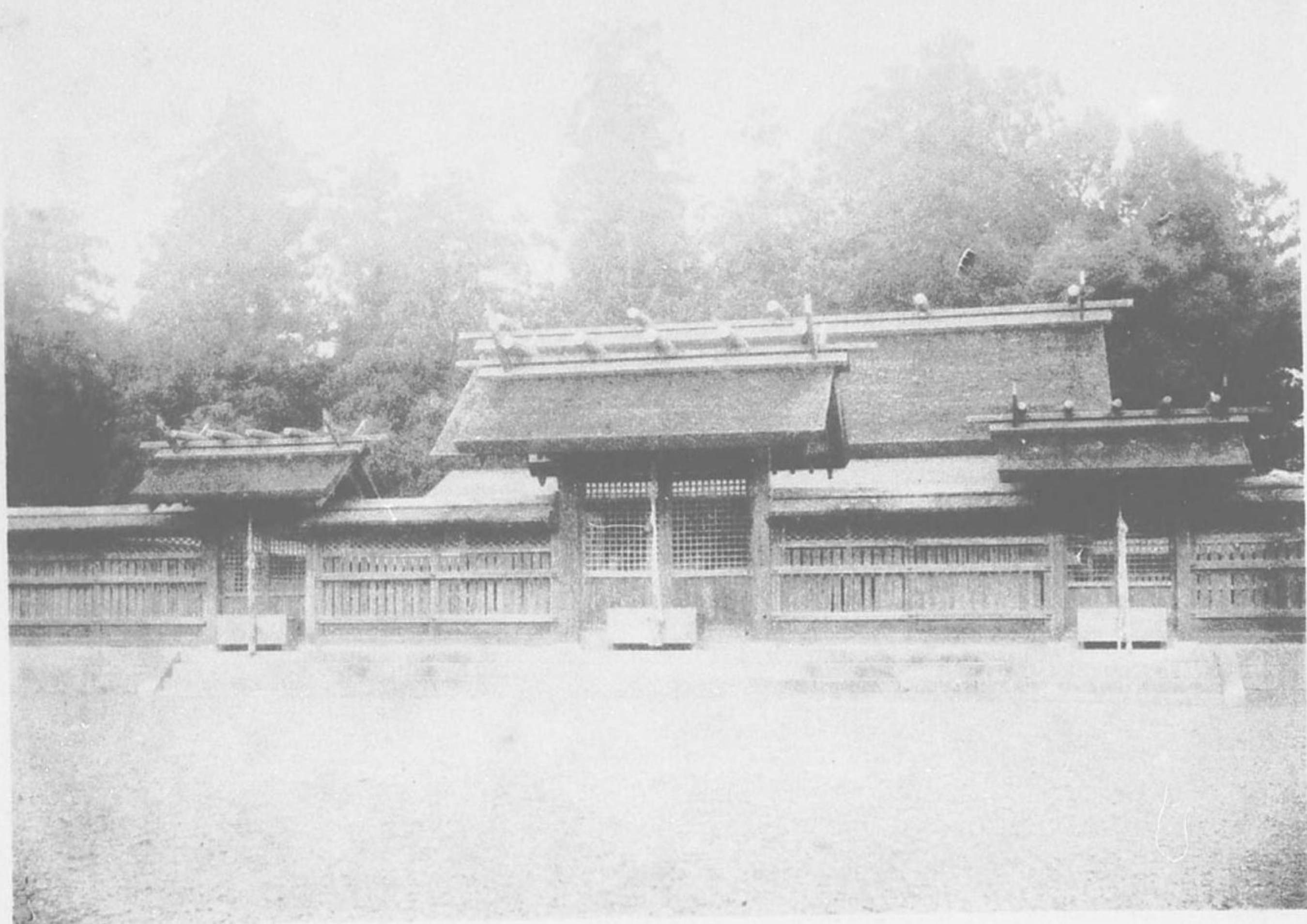
命其他の神々を六神殿に

齋祀し古は宏壯美麗なり

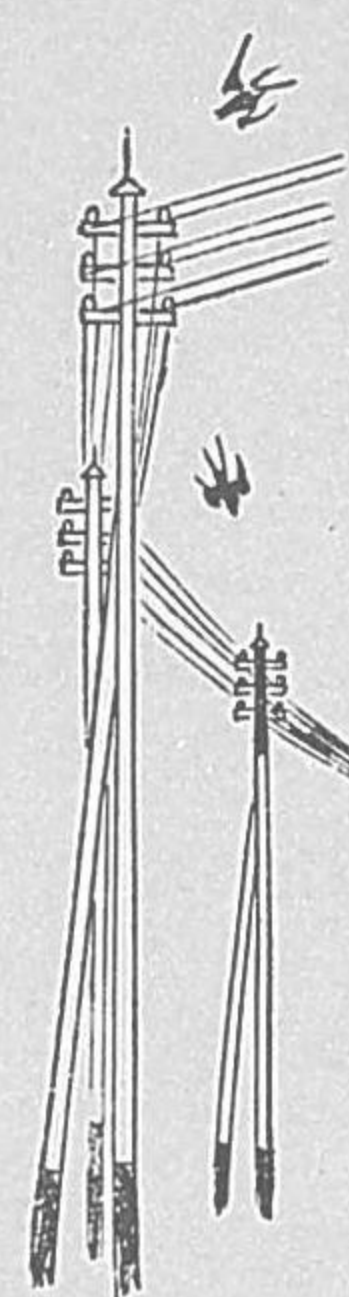
しが近歳回祿の災に罹りて

今は形ばかりの社殿な

れど神威は尙嚴然たり



新宮市中



熊野川に臨める市街にて舊
水野氏の城下なり家屋櫛比
いと賑はし此地治承の頃は
六條判官爲義の季子藏人源
行家居城し平家方本宮の大
江法眼と闘ひしこと盛衰記
に見ゆたり



秦徐福の墓

神仙脱就

避秦初

百幅雲帆

乘太虚



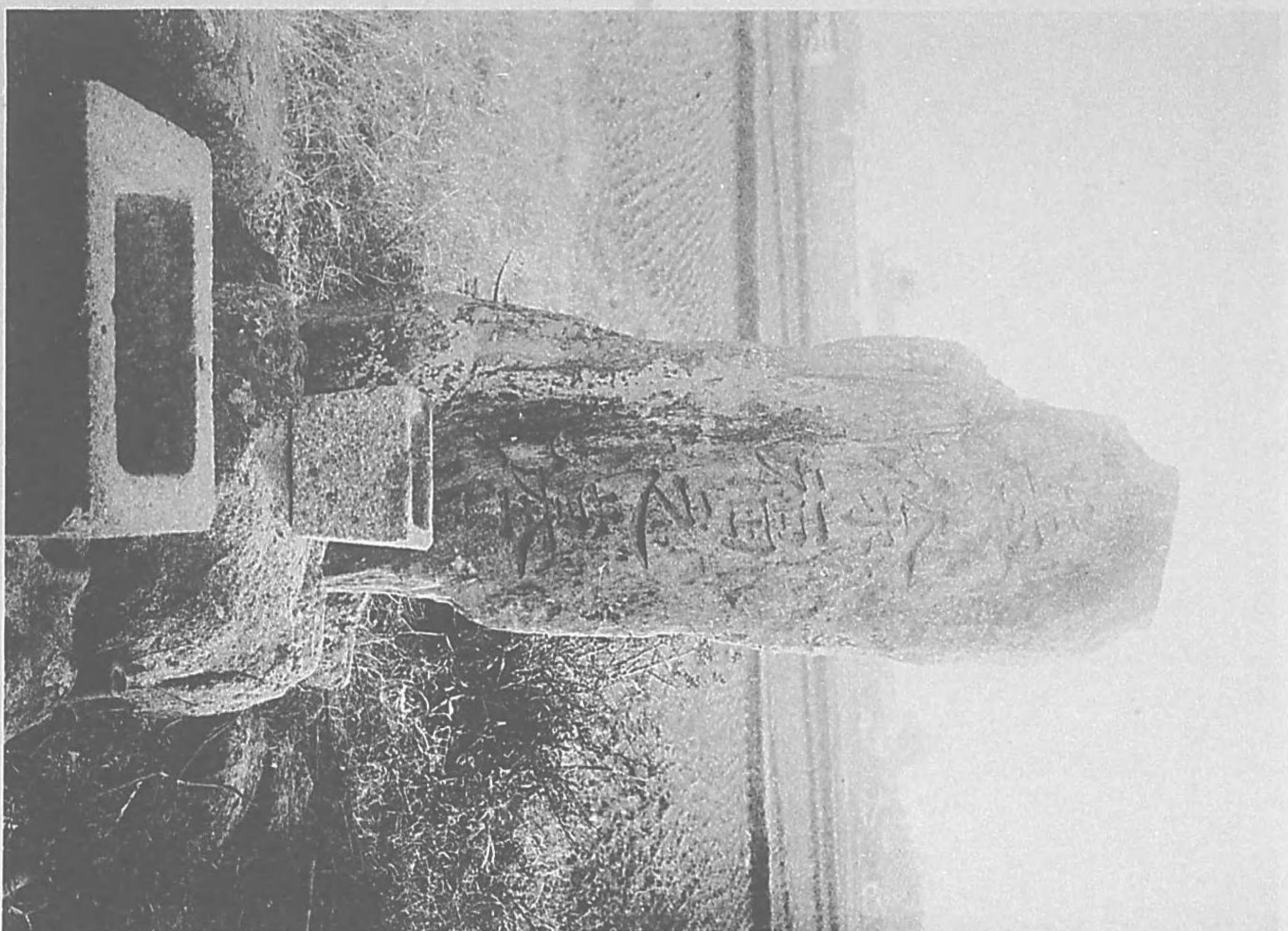
只恨徐生

載雞犬

不腐坑火

已前書

菊池溪琴



本宮權現

社傳に曰

崇神帝六十五年 天皇一夜夢見

給はく貴人南方より來りて我は

熊野川の河内に在

す神なり吾前を齋

き給ふべしと宣給

ふ是を以て大水口

宿禰を熊野に遣はし神殿を營造

せしめ給ふ今の本宮の原始なり



瀨
八
町

輕舟如箭

下清川

峰去巒來

枕席前



坐閱橫披

山水卷

瞥然過眼

幾雲煙

齋藤拙堂



熊野かへる岩

唐獅々にあらず高麗狗にあらず
我が古史にいへる谷蕞の姿を不
朽の岩もて造れる神工妙作愛す
べく驚くべし



手なついで
歌申し上る
蛙かな





鹿島

わたつみの

神の少女が花菱

かけて散らすな

磯による涙

千陸

白波の立つも

厭はで荒磯海を

わたるは月の

み舟なりけり

若生子



花の窟

怪石表靈窟

園陵鎮大荒

瓊矛探國土

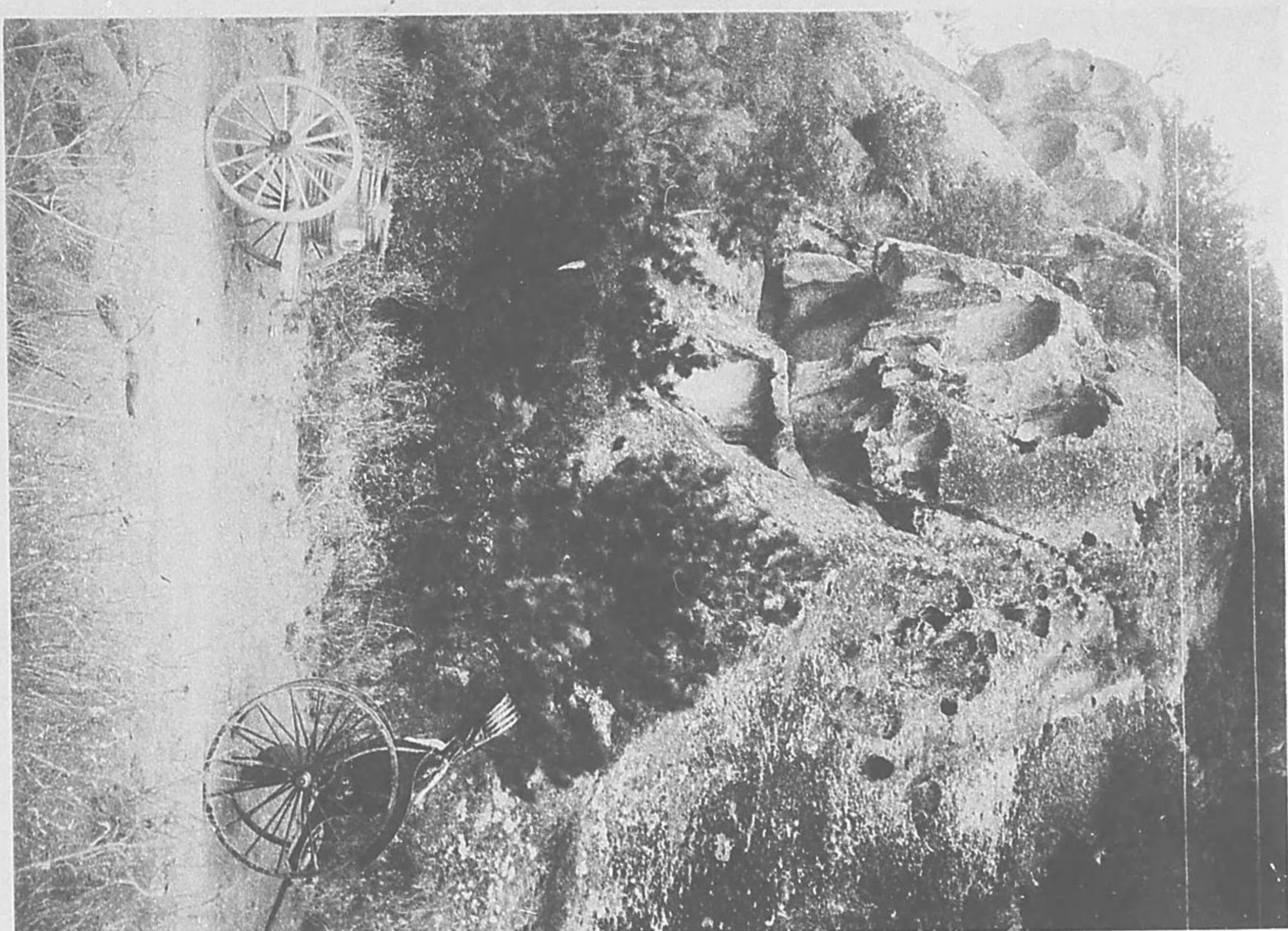
天柱列陰陽

神裔長垂統

夷首敢犯疆

野花薦時祭

遺德萬春香

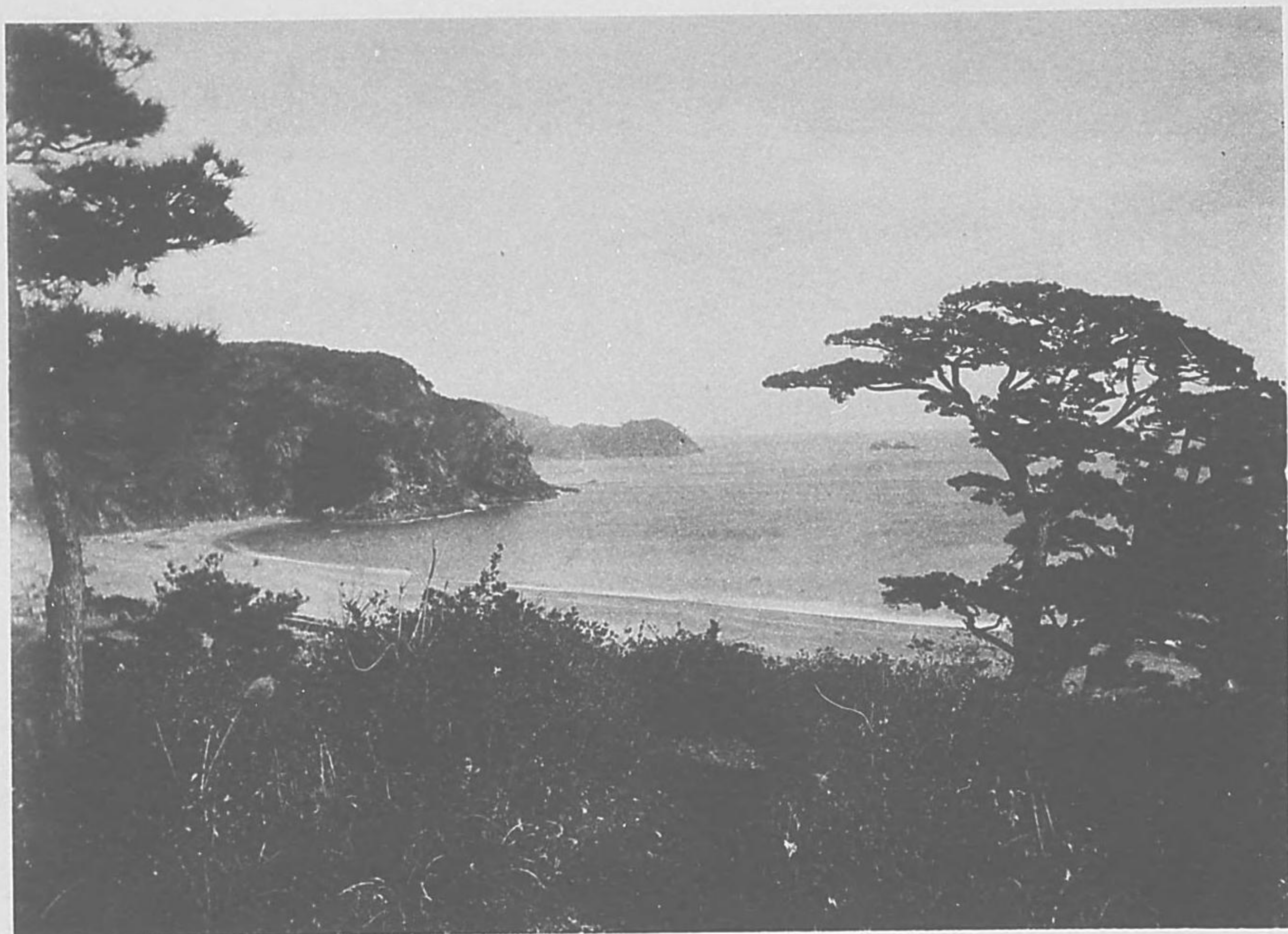


木の本浦

此浦より新宮に至るまでな
七里の濱と唱へて風光いと
美なり木の本町の大泊に



田村將軍の創建せしといふ
清水寺又清の流とて著名の
漆布あり



5/10/34

明治卅四年九月廿日印刷

(旅の家土産第四十號)

明治卅四年九月廿五日發行

(非賣品)

發行兼印刷者

八木富次

神戸市北長狭通五丁目四十六番地
光村利澤方寄留

發行所

光村寫眞部

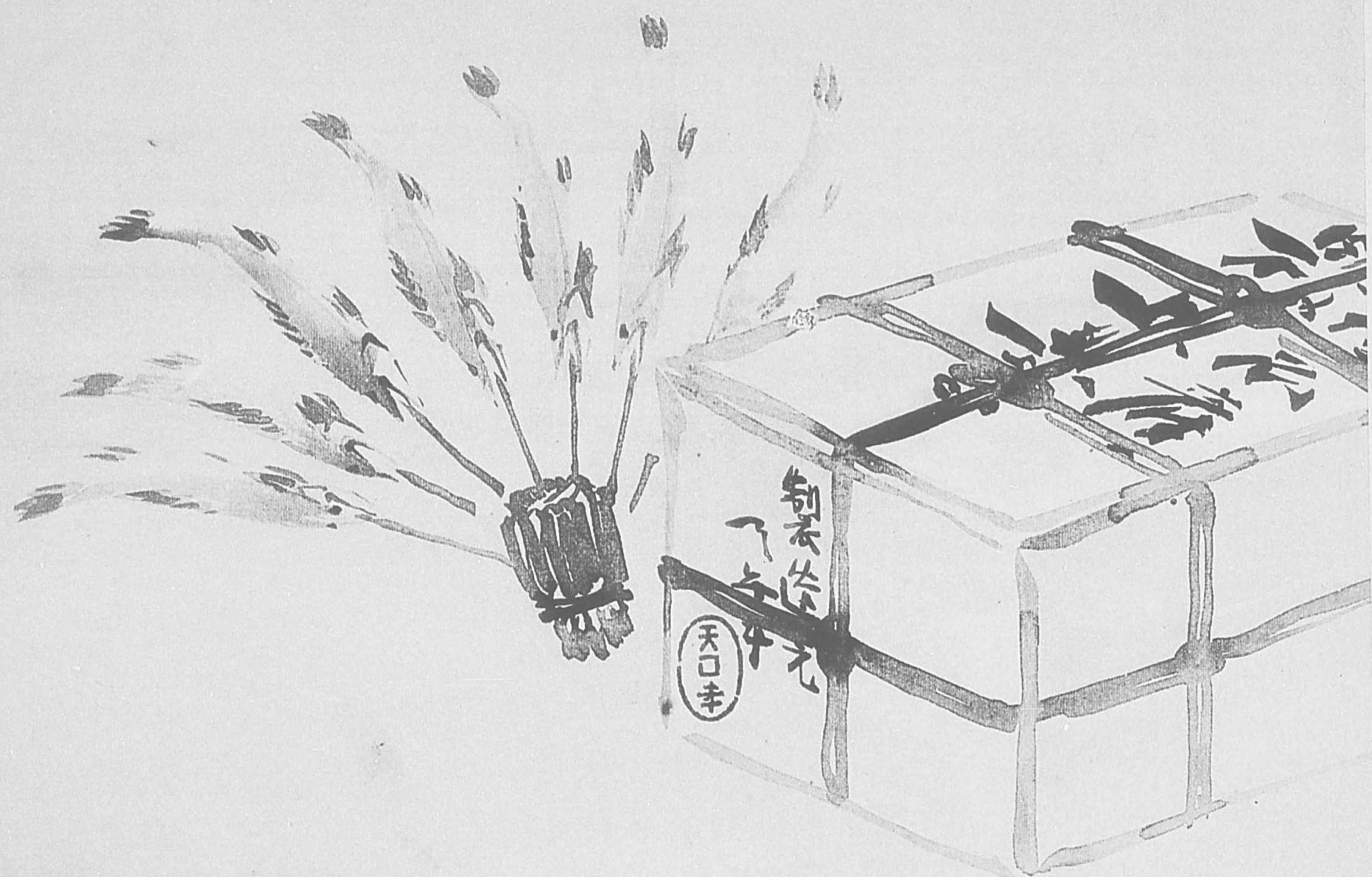
神戸市北長狭通五丁目四十六番地

印刷所

光村寫眞製版部

神戸市北長狭通五丁目四十六番地

8
522



梨
天口
幸

高 丁 白 札

十 二 月 廿 五 日 成 子

做 百 入 句

三 年 十 月 廿 五 日



8
222

終